

報 告

山口県における総合・循環型地域福祉サービス実施団体に関する調査

東 孝次*1

キーワード：総合、循環、地域福祉、共生ケア、高齢者、障害者、子ども

1 はじめに

西洋文明（科学）では、自然は克服すべき対象ととらえている。この複雑な自然をより正確に理解しようと、対象を細かく分類したり、現実にはない理想状態を想定して分析してきた。このことにより私たちは多くの知見を手に入れることができた。そして、この考え方を私たちの人間社会にも適用してきた。そのため、効率よく対応することができている。しかし、その効率性に目を奪われ、対象者が人間であることを忘れ、その人間性や人間としての生き方について目を向ける余裕はなかった。

このように西洋文明には優れた面と足りない部分とがある。このため私たちは、様々なことが複雑に混在する現実を前提に、様々な関連の中で物事をとらえる東洋文化（思想）に立ち返る必要がある。このような反省から、福祉の世界で取り組まれているものの一つに「①地域のなかで当たり前暮らすための小規模な居場所を提供し、②利用の求めに対しては高齢者、子ども、障害者という対象上の制約を与えることなく、③その場で展開される多様な人間関係を、共に生きるという新たなコミュニティとして形づくる営み」と規定される「共生ケア」¹⁾があると考えている。

さて、この「共生ケア」の全国的な取組は、平野隆之によると、1986（昭和61）年開設の「元気な亀さん」（埼玉）で初めて実施された。²⁾ 全国的に有名な取組は、1993年（平成5年）7月、富山市に開所された民営デイケアハウス「このゆびと一まれ」である。³⁾ 元上司の親身な忠告や兄姉ならではの反対を受けながら、高齢者、子ども、障害者という対象別に対応するという従来の福祉の常識を乗り越え、地域の中で当たり前

に暮らすための小規模な居場所を提供しようとしたのである。

私たちの地域には、高齢者をはじめ、子ども、障害者など様々な年齢・置かれた状況の異なる人たちが混在して生活している。そして相互に影響しながら生きているのである。このように考えると、従来の福祉の常識であった対象者を限定するということは、効率の点からは都合がよかったが、人間の暮らしとしては不自然なことであった。それに世代や障害の有無を超えた交流は、相互にいい影響を与えることにも着目する必要がある。成熟社会といわれる日本においても、そろそろ、様々な人々が混在するという自然な状況を前提に対応しようとする「共生ケア」の取組が、浸透していく必要がある。

2 研究の目的と方法

「共生ケア」の山口県での実施状況と今後の展開の可能性を明らかにするため、今回の調査では、山口県において「総合・循環型地域福祉サービス」を実践している団体の実態を明らかにすることにした。この「総合・循環型地域福祉サービス」を、「地域で支えるその人らしい暮らし」（山口県社会福祉協議会発行）では、「『誰もが身近な地域で、さまざまな福祉サービスを利用しやすい形（総合的・横断的）で受けことができ、住民ボランティア等も運営に参加しながら、世代間・利用者間で支え合いのサービスが循環する仕組み』をつくっていく新しいサービス」と規定している。

同書に「活動事例」として紹介されている10団体のうち、明らかに対象者を限定している2団体を除く8団体を対象にアンケート調査を行い、8団体のうち

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

聞き取り調査の了解が得られた4団体に対して聞き取り調査を行った。

なお、同書で紹介されている10団体には、「共生ケア」を実施している団体だけでなく、身近な地域で、既存施設の活用といった課題にも取り組んだ団体も含まれている。

3 アンケート調査

3-1 回収状況

前出の「地域で支えるその人らしい暮らし」で事例紹介された内容では現在実施していないと回答のあった1団体を除く7団体から回答が寄せられた。

3-2 結果

「地域で支えるその人らしい暮らし」で事例紹介されている団体の活動内容・形態は、それぞれ異なり、集計の意味合いは薄いものの、これらの団体の一定の傾向を把握するため、アンケート調査に対する回答状況をまとめた。その結果は次のとおりである。

3-2-1 現在の実施状況

まず、「現在の実施状況」について尋ねたところ、「思ったとおりに進んでいる」と回答のあった団体は、7団体中4団体（57.1%）であった。一方「思ったとおりに進んでいない」と回答のあった団体は、7団体中1団体（14.3%）であった。また「どちらとも言えない」と回答のあった団体は、7団体中2団体（28.6%）であった。

手探りの中での挑戦であることを考えると、まずまずの実施状況と言える。関係者の並々ならぬ努力の跡が伺える。その一方で、8団体中1団体ではあるが、当初の計画を断念せざるを得ない状況もみられた。理念どおりになかなか進められない現場の厳しさも伺える。

「思ったとおりに進んでいる」と回答のあった4団体に、その理由として最も強いものを挙げてもらったところ、4団体ともその理由は異なり、「思ったとおりに人材が集まったから」「思ったとおりに財源が集まっ

たから」「行政や社会福祉協議会の協力が得られたから」「様々な形で地域の協力が得られたから」ということであった。

また複数回答してもらったところ、「始める前にスタッフ等の関係者と十分議論していたから」「思ったとおりに人材が集まったから」「行政や社会福祉協議会の協力が得られたから」「様々な形で地域の協力が得られたから」と回答のあった団体は、4団体中3団体で、「関係機関や関係者と、事前に調整を済ませておいたから」「思ったとおりの利用があるから」と回答のあった団体は、4団体中2団体で、「地元で十分説明しておいたから」「思ったとおりに財源が集まったから」と回答のあった団体は、4団体中1団体であった。事前の周知準備がうまく進めるための秘訣と考えられる。

一方、「思ったとおりに進んでいない」と回答のあった1団体に、その理由を挙げてもらったところ、「利用者の参加人数を増やしたいが、対人関係の壁が厚い。物作りをしたいが、近くに指導者がいない」ということであった。地域福祉を考える場合、特に地縁関係の濃密な地域では、人間関係への配慮と対策が重要と考えられる。

3-2-2 実施して良かったこと

次に、「実施して良かったこと」を自由に記載してもらったところ、各団体様々で、次の点が挙げられた。

「地域の理解者が多く、とても助けられている」「地域住民の交流の輪が広がった。ボランティアで関わる人が増えつつある。地域に溶け込んだ施設になりつつある」「利用者に笑顔が出てきたこと。地域の中で高齢者と若い人（ボランティア）がスムーズにいくようになった」「地域住民に事業内容を理解され、利用者の利用につながったこと」「法人の設立以来、人材の養成（特にボランティア養成）に力を入れてきた。その結果、スタッフ面では申し分のない状況にあると思う」「ボ連協の会員が単に自分の所属するボランティアグループの活動だけでなく、預かりサービスを通じて、地域の方たちと触れ合う機会が増え、地域の福祉課題につい

て自分たちがどう関わっていくかを考えるようになった」「地域で生活している精神障がい者の人達の行き場、交流の場ができたこと。地域住民の方達との関わりの場ができ、住民の啓発活動につながったこと。退院後の受け皿、ソーシャルサポートネットワークの構築ができたこと」

関係者の並々ならぬ努力により、着実に活動が定着している様子が伺える。

3-2-3 不十分だと感じていること

続いて、「不十分だと感じていること」を自由に記載してもらったところ、各団体様々で、次の点が挙げられた。

「放課後預かりのスタッフの確保。子守りボランティア、調理ボランティアの登録がもう少し確保できたら良いと思う」「施設の維持管理(安全確保)」「財源の確保が、今後の活動の継続という面で重要な要因になっている」「地域の方たちに存在をもっと知ってもらいたい、利用してもらいたい」「運営していく上での経済的な基盤とボランティアの確保」

人材や財源の確保、施設の利用といったことが、不十分なことと感じている。

3-2-4 地元との関係

「地元との関係」について尋ねたところ、「大変協力的で大いに助かっている」という回答が最も多く7団体中3団体(42.8%)であり、「もともと地域の要望に基づいて設置したものであり、大変協力的で大いに助かっている」という回答が7団体中2団体(28.6%)であり、「適当な距離を保っている」という回答が7団体中1団体(14.3%)であり、不明が7団体中1団体(14.3%)であった。

地元との関係は、比較的良好で、特に問題もなく、順調に進んでいる。

3-2-5 利用者の確保状況

「利用者の確保状況」について尋ねたところ、「採算が取れる程度にはある」という回答が最も多く7団体中4団体(57.1%)であり、「年々利用者は増加してお

り、予定通り、ゆるやかな利用である」「毎年増加の傾向にあるが、採算面では問題」「定期的預かりサービスは毎回5人程度の利用があり、スペース的にもちょうど良いくらいである」という回答が7団体中1団体(14.3%)であった。

利用者の確保状況についても、まずまずの状況といえる。

3-2-6 経営状況

「経営状況」について尋ねたところ、「行政や社会福祉協議会の協力があり、まずまずである」という回答が最も多く7団体中3団体(42.8%)であり、「地域の協力もあり、まずまずである」「地域や行政・社会福祉協議会の協力があり、まずまずである」「行政や社会福祉協議会の協力があるが、なんとかギリギリ経営できている」「なんとかギリギリ経営できている」という回答が7団体中1団体(14.3%)であった。

また経営状況についても、まずまずの状況といえる。関係の皆さんの並々ならぬ努力の賜物と考えられる。

3-2-7 人材の確保状況

「人材の確保状況」について尋ねたところ、「スタッフもボランティアもまずまず確保できている」という回答が最も多く7団体中3団体(42.8%)であり、「スタッフの確保が難しい」「ボランティアの確保が難しい」「スタッフもボランティアも確保が難しい」という回答が7団体中1団体(14.3%)であり、不明が7団体中1団体(14.3%)であった。

人材の確保状況については、まずまず確保できている団体がある一方で、人材確保が難しいとする団体もある。

3-2-8 スタッフ間の交流や情報の共有化

「スタッフ間の交流や情報の共有化」について尋ねたところ、「特に問題はない」という回答が最も多く7団体中6団体(85.7%)であり、「今後の課題だと思っている」という回答が7団体中1団体(14.3%)であった。

現状では特に問題になっていないようであるが、今

後事業が拡大してくると、大きな課題となってくるものと考えられる。

3-2-9 今後の課題

次に、「今後の課題」を自由に記載してもらったところ、各団体様々で、次の点が挙げられた。

「今年度、納屋を改修して、放課後預かり及び障害者デイサービスの定員増加を予定している。スタッフ及び職員の配置が十分できるか検討中」「施設のメンテナンス」「スタッフの若返り、助成金の確保、物作りの指導者の確保」「現状の地域住民だけでなく、もう少し地域を拡張し住民ニーズを取り入れたサービス向上に努めたいと思います」「新たな問題が発生し、それへの対応の中で、新たな事業（活動）を起こすという方法で、これまでやってきているが、専従のスタッフを置くことが難しく、そのような対応がうまく機能していないのではないかという思いがあります。少しスピードをゆるめた中での運営を考える必要があるようです。」「定期的預かりサービスの利用希望が増えると、回数やグループ等を考えなければいけない。基本的にボランティアの活動の場としているので、限られたスペースでの有効な使い方を考えなければいけない」「行政、病院、家族会等との連携強化」となっている。

各団体の活動の内容や状況によって、様々な課題が挙げられた。

3-2-10 今後の展開

次に、「今後の展開」を自由に記載してもらったところ、各団体様々で、次の点が挙げられた。

「多様な使用（子供から大人まで）の仕方を期待する」「3つの方向性①定期的預かりサービスの積極的な展開（回数、内容等）②昼食作りボランティアの有効活用一食を通じて地域とどう関わっていくか③地域交流の場としての利用」「地域に根づいた事業を展開しながら、地域ニーズに即したネットワークの構築」と3団体からしか回答がなく、「今後の課題」を受けて今後どう展開されるのかを明らかにしたいと尋ねたが、前問の「今後の課題」との区別が明確でない質問に感じ

られたようである。

3-2-11 地域住民への期待

「地域住民への期待」について、該当すると思われるものすべてを挙げてもらったところ、「ボランティアとして参加してほしい」「施設を積極的に利用してほしい」「私たちの活動を見守ってほしい」という回答が最も多く7団体中3団体（42.8%）であり、「寄付など財政的な支援をしてほしい」という回答が7団体中1団体（14.3%）であった。

地域に対しては、寄付などの財政的な支援ではなく、なんらかの形での参加か、見守るということを期待している。

3-2-12 行政や社会福祉協議会への期待

「行政や社会福祉協議会への期待」について、該当すると思われるものすべてを挙げてもらったところ、「行政、特に社会福祉協議会には人材派遣など人的支援をしてほしい」「総合・循環型地域福祉サービスに関する情報を伝えてほしい」という回答が最も多く7団体中3団体（42.8%）であり、「業務委託や補助金など、財政的な支援をしてほしい」「総合・循環型地域福祉サービスを実施している団体との交流の機会を設けてほしい」という回答が7団体中2団体（28.6%）であった。なお、「回答なし」が7団体中2団体（28.6%）であった。

行政や社会福祉協議会に対しては、「回答なし」が7団体中2団体であったものの、人的支援、情報提供、財政的支援、交流機会の設定など、関係者の行政や社会福祉協議会に対する期待は大きいものと言える。

3-2-13 自由意見

最後に、自由に意見を記載してもらったところ、次のものが寄せられた。

- ・まだまだ十分な活動ができていないものの、ゆるやかなルールで多様な使われ方ができれば良いと感じている
- ・当該施設は、ボランティア連絡協議会が事業の実施として、3つの場の使い方をしています。①ボランテ

ィア活動の拠点の場②ボ連協の預かりサービスの場③
地域交流の場

- ・開設当初は預かりサービスに重点を置いていましたが、急な場合の預かりは近頃利用がないので、いつでも利用できる窓口は開けていますが、月1回定期的にひとり暮らしや日中独居の方（比較的元気な方）たちのミーティング(昼食付)のような形でを行っています。
- ・現在では、ボランティア活動の拠点の場としての使い方を中心に預かりや地域交流の場としての利用も行っていきます

- ・市からの補助金、助成金のあり方を検討してほしい

3-3 アンケート調査のまとめ

以上の結果から次のことがいえる。

- ・手探りの中での実施を考えると、まずまずの実施状況と言える。その一方で、8団体中1団体ではあるが、当初の計画を断念せざるを得ない状況もみられ、理念どおりになかなか進められない現場の厳しさも伺える。
- ・事前の周到な準備がうまく進めるための秘訣と考えられる。
- ・地域福祉を考える場合、特に地縁関係の濃密な地域では、人間関係への配慮と対策が重要と考えられる。
- ・地元との関係は、比較的良好であり、なんらかの形で参加か、見守るということを地元を期待している。
- ・利用者の確保状況や経営状況については、まずまずの状況である。
- ・人材の確保状況については、まずまず確保できている団体がある一方で、人材確保が難しいとする団体もある。
- ・関係者の行政や社会福祉協議会に対する期待は大きいものと言える。
- ・今後の課題や展開は、各団体の活動の内容や状況によって、様々である。

4 聞き取り調査

4-1 実施状況

アンケート調査で回答のあった7団体のうち、4団体について聞き取り調査の受諾があり、平成21年7月

13日と16日の2日間で聞き取り調査を実施した。

4-2 結果

4団体とも、全く異なる活動であることから、聞き取った内容を各団体ごとに簡単にまとめることで報告とする。

事例1：地域の社会福祉法人が先導的に地域づくりの拠点を整備した事例である。施設整備にあたっては、ローコストでできる中古のシーコンテナを活用し、ペンキ塗りもイベント化して地元民の参加も募るなど、様々な工夫を行っている。位置的にも規模的にも地域づくりの拠点到ふさわしい様相を呈している。地元主導による運営が課題となっており、今後の展開が期待される。

事例2：県内唯一の共生ケアを地域の社会福祉法人が実施している事例である。所有者の好意により古民家を活用して介護保険デイサービス事業を中心に実施している。活動理念は、「赤ちゃんからお年寄りまで、障がいの有無に関わらず、地域の中の第2の家として、誰もが集い、地域住民と共に、みんなが笑顔になるよう、一人ひとりが役割を担い、ふれあい支えあいます」としている。また障害者デイサービスも実施している。比較的近くに小学校があることから、放課後預かりサービス（児童クラブ）の事業も併設している。このため、共生ケアを比較的スムーズに行っている。赤ちゃんの泣き声に閉口する高齢者もいるが、赤ちゃんの天真爛漫な表情、動きに安らぎを感じる高齢者が多いという。子供には必ず高齢者に挨拶させることにしているといい、子供たちは高齢者の部屋に行くことを楽しみにしている。介護保険デイサービスなどのメイン事業については毎日行われており、地域住民にとって、とても頼りになる施設となっている。

古民家を活用していることから、思わぬ修理費が必要になっている。既存の枠の中で展開をせざるを得ないことから、思いどおりのことができないといった悩みもあるようだ。

事例3：地域の社会福祉法人が地域の民家を活用して介護保険デイサービス事業を中心に実施している事例である。地域の社会福祉法人の設立精神に基づき、地域の人々の信頼を得るために、給食配達サービスに併せて安否確認等を行うなど地道な活動を展開している。遠く離れて暮らさざるを得ない家族を安心させる活動も展開している。今後は、少し対象の地域を拡大して、事業を広げようと検討している。なお寒冷地での事業であるため冬場の雪対策には苦労されているようだ。

事例4：地域の高齢者が自らの地域の活性化に立ち上がった事例である。その意味では地域福祉の理想的なあり方を具現化したものである。ただ余りに地縁的であるため、時間と関係者の努力が必要となっている。事務局が70歳以上と高齢であるため、事業が限定的にしか行えない。特別養護老人ホーム「白滝荘」との連携はとて素晴らしい関係で行われている。旧J A出張所を改修され、地域活性化の拠点が整備されている。この施設を活用して、様々な取組を行うことが求められている。そのためにも、活動の担い手の若年化が求められる。また地元の社会福祉法人や他のNPO法人などとの連携が必要になっている。

4-3 聞き取り調査のまとめ

今回の聞き取り調査で明らかになったことは次のとおりである。

- ・今回の調査のメインのテーマは「高齢者から子供まで同じ空間でデイサービスを行っている団体の山口県での実施状況と拡大の可能性」ということであった。その意味からは、現実にそのような形で行っている団体は1つだけであった。当初はそのような方向を目指したものの、様々な要因で実現できなかった団体もあった。
- ・その一方で、とても重要な活動を展開している団体もあった。給食の配達に併せて安否確認等を行っているのである。遠くで暮らさざるを得ない家族にとっては、とても安心できることだと考えられる。山口県の

現状を考えると、今後とても重要な活動であるといえる。

- ・また、地域の高齢者が自らの地域の活性化に立ち上がった事例がある。地域活性化のために、高齢者の交流の場をつくろうと努力している。自らの問題として地元民が立ち上がったことは、地域福祉の原点であり、うまく発展できる仕組みが必要となってくる。今回のケースでは、中心となって活動している人たちがやや高齢であることから限定的な活動しかできない。地域の社会福祉法人の支援をはじめ様々なNPO法人などによるサポートが必要である。

- ・さらに、地元社会福祉協議会が先導的に地域づくりの拠点を整備し、これから地域住民による自主的な地域福祉の展開が期待されている事例である。

- ・古民家の活用は、高齢者にとってとてもなじみやすいものである。しかし、ここに多少問題がある。建物が老朽化すれば、おのずと修理が必要となり、思わぬ修理費が必要になり、耐震性やシロアリなどの問題もある。補助金制度の工夫が必要になってくるものと思われる。

- ・「共生ケア」をNPO法人などの民間団体（ここでは地域の社会福祉法人は除く。以下「民間法人」という。）が行うのか、経営の一定安定している地域の社会福祉法人が実施したのがどうか議論の分かれるところである。山口県の場合は、富山で行われている「このゆびと一まれ」とは異なり、地域の社会福祉法人が行っている。地域住民の寄付で成り立っている地域の社会福祉法人が地域貢献の一環として実施することは合理性がある。しかし、従来の枠をはみ出さざるを得ない「共生ケア」においては、古い歴史を持つ地域の社会福祉法人にはなじみにくい面もある。一方、財政基盤の弱い民間法人では、既存の制度を活用しながらでも、採算を取るまでの余裕はないものと思われる。

- ・共生ケアを単独で実施するのではなく地域づくりとして取り組むことが、山口県でも共生ケアを広げていく上で重要だと考えられる。

・明治以降、連綿と続く縦割り行政の中では、「共生ケア」を実施していこうとすれば、既存制度に無理やり合わせなければ、財政的な支援はない。また定員制度についても、現場ではなじみにくいものである。施設や職員数、予算の規模の観点から、一定やむを得ない面はあるが、もっと臨機応変に対応できる仕組みを考えていく必要がある。

5 まとめ

山口県で「共生ケア」を推進していくために検討すべき課題を列記することで、本調査のまとめとしたい。

・全国的によく知られる富山県での「このゆびと一まれ」が平成5年に始められてはや16年経過しているが、山口県における「共生ケア」は、今回の調査で明らかになった範囲では、わずか1か所である。「このゆびと一まれ」は、いくつかの好条件に恵まれたものであり、まれなケースといえる。「共生ケア」を行うためにはいくつかの既存制度と葛藤しなければならないことから、しがらみの少ない民間法人の方が実施しやすいかもしれない。しかし、経営の不安定さを解消できる支援がない限り、民間法人による実施は難しい。このような現実を踏まえると、山口県において「共生ケア」を進めていくためには、古い歴史を持つことから難しい側面はあるものの、地域住民の寄付で成り立っている地域の社会福祉法人が地域貢献の一環として行うことによらざるを得ないと考えられる。それには前例にこだ

わらない行政の支援も必要不可欠と思われる。

・「共生ケア」を狭い福祉の分野に留めるのではなく、地域づくりの大きな柱として捉えることが重要であり、そのための支援の在り方を考えていく必要がある。同時に、行政には従来の枠を乗り越えることが求められる。

・安否確認も兼ねた給食配達制度を、遠く離れて暮らさざるを得ない家族も含めて検討していく必要がある。

謝辞

お忙しい中、快く本調査に回答くださった各団体の皆さん、ご協力ありがとうございました。

本調査の実施に際し、山口県立大学高野和良教授に様々な助言をいただいた。また、聞き取り調査では、本学3年生の阿武直利君、水津秀幸君、吉野光明君の3人に協力してもらった。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 平野隆之; 共生ケアの営みと支援, 筒井書房, 2005, p.14
- 2) 平野隆之; 共生ケアの営みと支援, 筒井書房, 2005, p.18
- 3) 惣万佳代子; 『富山型』 デイサービスの日々 笑顔の大家族このゆびと～まれ, 水書房, 2002

総合・循環型地域福祉サービス実施団体に関するアンケート調査

I 現状について

問1 現在の状況をどのように感じておられますか。該当するものに○印をつけてください。

- 1 思ったとおりに進んでいる → 1-2に進んでください。
- 2 思ったとおりに進んでいない → 1-3に進んでください。
- 3 どちらとも言えない。 → 2に進んでください。

【問1で「1」に○印をつけられた方のみお答えください。】

1-2 どうしてうまくいっていないと思われませんか。該当すると思われるもの、すべてに○印をつけてください。そのうち最も該当すると思われるもの1つに◎印をつけてください。

- 1 始める前にスタッフ等の関係者と十分議論していたから
- 2 関係機関や関係者と、事前に調整を済ませておいたから
- 3 思ったとおりの利用があるから
- 4 地元で十分説明しておいたから
- 5 思ったとおりに人材が集まったから
- 6 思ったとおりに財源が集まったから
- 7 行政や社会福祉協議会の協力が得られたから
- 8 様々な形で地域の協力が得られたから
- 9 その他 ()

【問1で「2」に○印をつけられた方のみお答えください。】

1-3 どうしてうまくいっていないと思われませんか。該当すると思われるもの、すべてに○印をつけてください。そのうち最も該当すると思われるもの1つに◎印をつけてください。

- 1 始める前にスタッフ等の関係者と十分議論していなかったから
- 2 関係機関や関係者と、事前に調整を済ませておかなかったから
- 3 思ったとおりの利用がないから
- 4 地元で十分説明しておかなかったから
- 5 思ったとおりに人材が集まらないから
- 6 思ったとおりに財源が集まらないから
- 7 行政や社会福祉協議会の協力が得られなかったから
- 8 地域の協力が得られないから
- 9 その他 ()

問2 どのようなことが良かったと感じておられますか。自由にご記入ください。

.....

.....

.....

.....

問3 どのようなことが不十分だと感じておられますか。自由にご記入ください。

.....

.....

.....

.....

問4 地域（地元）との関係はどうですか。

- 1 大変協力的で大いに助かっている
- 2 もともと地域の要望に基づいて設置したものである
- 3 あまり地域の協力は得られていない
- 4 地域の反発を受けている
- 5 その他 ()

問5 利用者の確保状況はどうですか。

- 1 断らなければならないほど多い
- 2 採算が取れる程度にはある
- 3 思ったとおりに利用者がいない
- 4 ほとんどない
- 5 その他 ()

問6 経営的にうまくいっていますか。

- 1 地域の協力もあり、まずまずである
- 2 行政や社会福祉協議会の協力があり、まずまずである
- 3 なんとかかぎりギリ経営できている
- 4 今後続けていくことはかなり厳しい
- 5 その他 ()

問7 人材の確保はうまくいっていますか。

- 1 スタッフもボランティアもまずまず確保できている
- 2 スタッフの確保が難しい
- 3 ボランティアの確保が難しい
- 4 その他 ()

問8 スタッフ間の交流や情報の共有はうまくいっていますか。

- 1 特に問題はない
- 2 今後の課題だと思っている
- 3 その他 ()

II 今後の展開について

問9 今後の課題としてどのようなことがあると考えていますか。

問10 今後どのような展開をお考えですか。自由にご記入ください。

問11 地域住民に期待されることはありますか。該当すると思われるもの、すべてに○印をつけてください。

- 1 ボランティアとして参加してほしい
- 2 寄付など財政的な支援してほしい
- 3 施設を積極的に利用してほしい
- 4 私たちの活動を見守ってほしい
- 5 その他 ()

問12 行政や社会福祉協議会に期待されることはありますか。該当すると思われるもの、すべてに○印をつけてください。

- 1 業務委託や補助金など、財政的な支援をしてほしい
- 2 行政、特に社会福祉協議会には人材派遣など人的な支援をしてほしい
- 3 総合・循環型地域福祉サージスに関する情報を伝えてほしい
- 4 総合・循環型地域福祉サージスを実施している団体との交流の機会を設けてほしい
- 5 その他 ()

